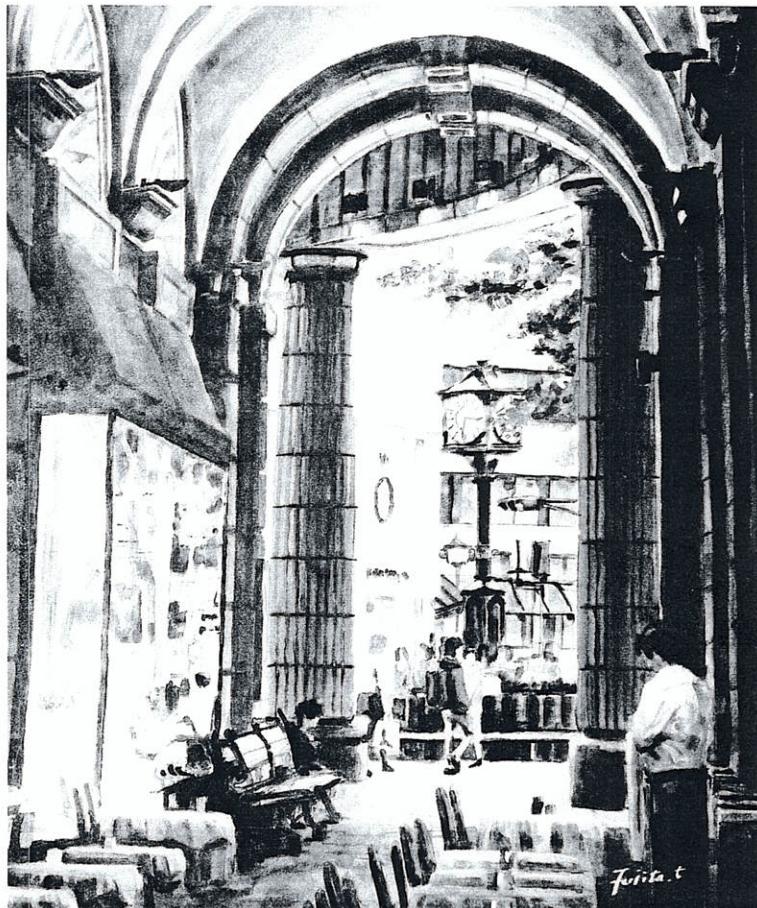


歴史と神戸

特集 史料で読み解くひょうご近世史



59巻5号／歴史と神戸／もくじ

特集 史料で読み解くひょうご近世史

- 幕末期の大坂湾防禦と淡路島 廣田 晋也 (1)
－台場と人工湊の築造に向けて－
- 明石で諸道を究めた宮本武蔵 濱田 昭生 (14)
- 兵庫県西国街道一里塚（七）－相生市陸－ 中村 和男 (28)
- 寛延二年姫路藩百姓一揆 『播姫太平記』の世界 歌井 昭夫 (34)
- 残暑見舞い申し上げます (49)

新聞地域版 (33、49) 受贈図書 (13、27) 新入会員紹介 (49)
表紙・藤田年男

卷頭言

宝塚市史編集室元主査の若林泰さんが収集した史料のうち、神戸市灘区篠原村と北区の有野村の史料を、奥様の了解を得て神戸市文書館に寄贈した。若林さんは灘地方の中世以来の名家若林家に生まれ、幼いころから歴史研究に関心を持った。灘高校時代に古文書を解読し「灘文化」という雑誌を行なった。関学で大学院に進み家業の酒造業は継がず歴史の道に進んだ。しかし一九八五年五十六歳の若さで病死。我々は「偲ぶ会」を作り三回忌に遺稿集『灘・神戸地方史の研究』を刊行した。集めた史料は「偲ぶ会」が整理をしてそれぞれきちんと保存活用してもらえる組織に寄贈している。すでに藩札・私札は黒川古文化研究所に、近代の海運関係や近世の村方文書などは神戸大学附属図書館に。そしてこのたびの神戸市文書館への寄贈で終了となつた。命は有限だが史料は永遠にと願つてゐる。

明石で諸道を究めた宮本武蔵

濱田昭生

はじめに

宮本武蔵（一五八二年～一六四五年）とは、生まれながらにしてミステリアスで、したがつてその一生もよく判つていらないと言われている。だが彼は、自著『五輪書』⁽¹⁾に記すよう「巖流島の決闘（一六一二年）まで、六〇余回、真剣勝負しても敗を知らず」というほどの剣豪である。

さりとて彼が明石へ来て闘つた剣客とは、記録では彼が軽くあしらつたという無双権之助だけであり、これ以外の彼の記録は、剣豪とあまり関係ないと思われる。その記録を掲げてみると、それは「明石城下町の町割りをしたこと」「明石城内で樹木屋敷を築造したこと」「将軍への献上品として湯たんぽを作成したこと」、否定する説もあるが多くの寺院で作庭したこと⁽²⁾であり、他は「武蔵の養子・伊織が明石藩主・小笠原忠真⁽³⁾の小姓となり、その伊織が五年後、家老に抜擢されたこと」「忠真の小倉への転封に武藏も同道したこと」といった内容であろうか。

1、武蔵はなぜ明石藩に来て重用されたのか

1 体験から生まれた武蔵の「城塞論」

筆者は宮本武蔵が独自の「城塞論」を体得したのは、一六一五年の大坂夏の陣の体験が大きいと考えている。この戦いで武蔵は、徳川勢の水野勝成軍に参陣した。戦いは四月二九日に始まつた。武蔵も木刀を持って戦つたといわれている。戦いはたつた一週間ほどの五月七日に終結した。

半年前の大坂冬の陣では、大軍の徳川勢から攻められても、びくともしなかつた天下に誇る難攻不落の巨城・大坂城が短期間で炎上し落城したのは、「肝心要の中堀や内堀などが埋められたからだ」と武蔵は知つたに違ひない。

そして陣後に勝成が貰い受けた大和郡山六万石の城郭や城下町は、自然の要害も少なかつたこともあってか豊臣方の攻撃で甚大な戦禍を被つていた。よつて勝成の配下にいた武蔵は、その城や町の復旧、復興に尽力したと推し量る。こうして武蔵は大坂城などでの敗因を分析し、そこで天守閣・本丸を敵から守る城郭や堀などの築き方、城へ敵を行かせない町造りの方策、さらにその町へ敵も容易に侵攻できない自然要害などの存在が、軍事的・機能的に組み合わされて築かれる城塞論を纏めた、と考えたわけである。

2 姫路藩の客分となつた武蔵

一六一七年六月、姫路藩四二万石の池田光政が因幡伯耆・鳥取藩三二万石へ転ぜられ、その姫路藩は六分割された。同年七月、分割後の姫路藩は本多忠政と嫡男・本多忠刻に合わせて二五万石、新設の明石藩一〇万石は忠政の娘婿・小笠原忠真、同年九月、新設の龍野藩五万石は忠政の次男・本多政朝、等々に与えられた。

「西国探題」として姫路へ入城した本多忠政は姫路城内の鷺山辺りが全く無防備なままに放置されていることに気が付いた⁽³⁾。この時、武蔵は、姫路で「日本第一剣術之達」

人「宮本武蔵」の看板を掲げた武蔵道場を開いていた⁽⁴⁾。そのことを証しているのか、武蔵は後に本多家の家臣・石川左京清宣、青木与右衛門らを、また龍野・円光寺にも道場があつて多田祐甫らを指南し立身させたという。

この武蔵の掲げる道場の看板を知つた武闘派の忠政は、姫路辺りに日本第一剣術の達人などいる筈がないと思い、そこで本多家の剣客（指南役）・三宅軍太夫に、武蔵が「日本第一剣術の達人」なかどうかを調べてくるよう命じた。軍太夫は勇んで武蔵と闘つたが歯が立たず、よつて武蔵が「日本第一剣術の達人」であることを忠政に言上した。武蔵が剣術の達人であることに加え、兵法における城塞論にも長け、また巖流島のある北九州など、三河武士があまり知ることのない西国事情にも詳しかつた。だが仕官の気もない武蔵に対し、忠政は、やつとのことで武蔵を姫路藩の客分二〇〇石で取り立てたのであった⁽⁵⁾。

兵法家の目から見た姫路城の無防備やその対策を武蔵が指摘などしたのかどうか知る由もない。とはいえ忠政は、一六一八年五月から千姫と忠刻のために、鷺山の西ノ丸には「化粧櫓」、その平地の三ノ丸には「住居御殿」を建造するなど、懸案だった姫路城の防備を固めた⁽⁶⁾。

忠政は武蔵の養子・三木之助一四歳を、嫡男で千姫の夫・忠刻の小姓に登用した。客分の養子が主君の側近になるのはさほど多くないと思うが、姫路藩での武蔵のさらなる

活躍に期待した現れだろう。一六二六年忠刻の死去した際には三木之助二三歳は小姓頭として殉死するほどの忠臣ぶりだった（「姫路・書写山円教寺墓誌」）。

3 武藏が明石で活躍できた背景

武藏が明石に来て町割りをしたことはよく知られているが、その理由や経緯がはつきりしていなかつた（²）。元文年間（一七三六年～四〇）に柏崎永以が書いた『古老茶話』には、宮本武藏は「小笠原右近大夫（忠真）のまねきに依て江戸に下り、それより小笠原家の家来と成る」とある。これを踏まえ『講座 明石城史』は「忠真の招きによつて江戸へ下つたと記されており、武藏の高名を聞いた忠真が客分として呼んだのではないだろうか」と推測している。しかし忠真の最初の参府は、後述するが明石城や城下町がほぼ出来上がつてきた一六二二年であり、武藏が一六一九年頃からその町造りを始めていることを勘案すると、この『古老茶話』の話は間違い、と考える。

武藏が明石城下町造営に関わった経緯については『歴史と神戸』三三三二号掲載の拙稿で詳述した。一六一八年の春、明石藩主・小笠原忠真は大叔父の将軍・秀忠から義父の姫路藩主・本多忠政と協力して新城築城を命じられ、武藏は本多忠政によつて明石へ連れて来られたのである。忠政は、藩主となつて間もない忠真が築城などの帝王学教育もあまりされていないと見たのであろうか、忠真の教育も兼ねて、

六六六年）にある無双権之助で、その内容は次の通りである。

この頃、明石の武藏宅へ太刀を腰に差した六尺（約一・八メートル）豊かな大男が、弟子八人を引き連れて訪れてきた。大きな朱の丸の紋を付けた羽二重の羽織を着て、その背中には、「兵法天下一 日本開山 無双権之助」と金文字で刺繡してある。その仰々しい出で立ちに、武藏の家の者らは驚き構えたのだ。

この家の者らを制した武藏は、楊枝を削りながら、権之助たちを家へ迎え入れた。権之助は、武藏に「この度、九州筋へ志しているが、ここに住まわれていると知つてお尋ねした。ぜひ一太刀教えていただきたい」と立ち合いを申し入れてきたのである。

武藏が断ると、権之助は「関八州を申すに及ばず、これまで手合わせをして、我に勝つた者はいない。お手前の流儀を見せて欲しい」といった。武藏は「我的兵法は、打ち込まれるのを受け止めるものである」と言つては、削っていた楊枝の木片を取つて立ち上がつた。

勢い込んだ権之助は、木刀で隙間もなく武藏に打ち込んだのだ。武藏はちよいちよいと楊枝の木片で軽くあしらつた。すると苛立つた権之助がこれを横殴りに払うと、武藏の羽織を掠めたのである。「当たつた！」と権之助が大喜びする

城塞知識など豊富な武藏を忠真に紹介したと考える。

そして城下町も城の防衛機能の一環であり、明石藩にとって「最高機密」ともいえる城下町造営に武藏が関与したのである。それは武藏が「姫路藩の客分」「いとこである忠刻の小姓の養父」だつたことが背景にある。しかも落城した大坂城などの轍を踏まない為の「城造り」「町造り」「要害」の重要性を説く城塞論の話も聞いたのであろう、武藏を身内の重鎮として登用したのであつた。

その重用ぶりは、忠真が武藏の養子・伊織一五歳を小姓に登用、後に彼を二〇歳で明石藩の家老に抜擢した（³）。また武藏が忠真に、家臣の登用を上申した話として『旧新編録』（明石市史資料（近世編）所収）に、「寛永年中、明石にて、忠真公へ宮本武藏願いによりて林右衛門太郎と申す御小姓を召し抱えられ候。この者は太鼓をよく打ち候に付き、御意に入り相務め候」とある。さらに一六三二年一〇月、忠真が豊前小倉藩一五万石の「九州探題」に命ぜられるなど、武藏五一歳も小倉へ同道したという（『武公伝』）。これらのエピソードは藩主の親近に武藏がいることを示している。

二、明石での武藏の実績と多くの出会い

1 明石における剣豪としての武藏

武藏が明石で闘つたという唯一の記録は『海上物語』（一

と、武藏は「そんな当たりは、何の役にも立たない」といざまに素早く打ち込むと、権之助は手も足も出ず、そして眉間に打たれて倒れたのであつた。権之助は自分の非を認めて武藏の弟子になつたといふ。

武藏の強さは判るが、明石滞在中、これで剣豪として名を高めたとは到底思えない。しかも『二天記』（一七五五年）には時期不明だが、これを江戸での闘いと記している。ところで明石での武藏は、そうした剣豪とはまるでほど遠いことをしていたと思われる。それを順に見ていくたい。

2 武藏の町割り

明石では、一六一九年初から新城築城に併せて城下町も築造されることになった。そこで武藏は、忠真から町割りを命ぜられた。

明石町造ハ小笠原右近太夫忠政公御代元和年中（一六一五～二四年）開発也。宮本武藏ト云士町割有之ト云、町並裏行十六間（約二九メートル）也（『明石記』一七三六年）

そして武藏は、東西一二七四間（約二・三メートル）にもおよぶ城下町の築造を急いだ。取り分け城を守る工夫と町の発展も願つて、次のようなことに留意して町造りをしたと推し量る。

イ、信州・松本から小笠原家に同道してきた菩提寺八ヶ寺

や御用商人らの建物を町中に築く。

- 口・枝吉や船上の旧城下に散在する神社仏閣、鍛冶屋や樽屋、材木屋、織物、魚屋などの職人商人らも当該区画へ移住させる。区画としては、鍛冶屋町、細工町、東本町、西本町、東魚町、西魚町、信濃町、明石町、東樽屋町、西樽屋町の一〇町とする。

ハ・治安については、海上からの侵攻を防ぐ為に山陽道を海に近い道筋に変更し、しかも敵から狙われ易いその西南の地には「明石寺町」と呼ばれるような二〇も超える神社仏閣を集約し一種の砦とする。また陸路での不審者にも備える為に山陽道などの主要な場所には木戸や番所を設置する。

二・城へ行かせない工夫としては、右記のハに加え、山陽道などに接した町名が変わる箇所は屈曲させる。いわゆる遠見遮断、七曲りで、例えば現存するのは鍛冶屋町と本町一丁目である。敵が侵攻して来た時には建物を壊して行き止まりにするなど容易に城へ近付けないようにする。

また城下町の建物は似通つて紛らわしいよう碁盤目状で等間隔に並べるとともに、裏口からも神出鬼没などし易いよう敷地の奥行きを広く取つて一律「一六間」とする。さらに敵が明石川を渡つても、城に近付くことができないよう町中にも入れないよう、川の東面の堤防付近

は出来るだけ竹藪とする（大竹藪：参考「文久年間明石町之図」）。

ホ・貨客定期船などの運航に供する為の明石港内の西側に船の係留・船着場、倉庫や待合なども設置、配備し利便性を図る。

3 諸芸能人らの来明

さて小笠原忠真は名君だと言われている。因みに、『講座 明石城史』は「その温かい人柄に心惹かれるものを感じている」とか、『史話 明石城』も「皆に憐れみを掛けられるように、：一枝一能に秀でた者があれば、これを愛した」と忠真を評している。

それ故に、松本から同道して來た菩提寺の高僧らも含め、この忠真の人柄に惹かれてか『小笠原忠真一代覚書』に、「右近様（忠真）、明石へ御入部遊ばされ候て以後、御見舞い（御機嫌伺い）參り候者どもは：」とあるように、忠真の明石在任期間中、一枝一能に秀でた人たちが次のように絶えることなく御機嫌伺いなどと称して明石へやつて來たのである。

・焼き物の名人で織部焼・戸田織部助が御庭焼（明石焼、朝霧焼など）を教えに來た。

・刀剣の手入れや鑑定などを専門とする本阿弥の光雲に光雲の親（一〇世本阿弥光室）も来る。なお本阿弥光悦は分家である。

・御鞠（まり）に下条三郎兵衛、鮎川源太、小鼓打ちの役者・岡本忠左衛門が相手した。また京の家柄・飛鳥井殿も正装でお越しになられた。

・医師の山崎寿磨などを御数寄屋に召し置かれ、茶を下された、等々。

4 武藏の転機？：明石で諸道を探究する

これらの人々は、築城や町造り中でこつた返している時であつても、お構いなしに忠真を慕つて明石へやつて來たのだ。忠真の来客ではあつたが、側近だった武藏も出会い交流する機会があつたことは想像に難くない。

何となれば、忠真にとって大切な一芸に秀でた卓抜した人々を、町割りの総責任者・武藏は、遺漏のないよう当然に案内とか宿所などの世話をした筈であろう。しかも探求心旺盛な武藏は、その間、彼らと親交を重ねながら、その芸の奥深さなどに触れていたに違いない。

また武藏は、神社仏閣を建築するにあたつて碩学の宗教者らから要望などを聞いては、それを名のある棟梁、大工、技巧を凝らす建具師（彫刻）、自然界を鑑賞用に凝縮し配する庭師らと調整もしたであろう。さらに信玄の甲州軍学に影響を受けたといわれる小笠原軍学の研究会や、忠真が指南してもらう為に柳生宗矩を通じて招聘した宗矩の甥・柳生五郎兵衛の試技についても、武藏は時に同席したであろう。

- ・碁所・本因坊の弟子と一番を打つ。碁打道碁、三悦門人、因碁、利斎、これは一人二人を連れて度々来る。
- ・能役者の今春七郎重勝（能の今春流）、親子連れで來た。
- ・御座敷にて橋弁慶のきりを親子で舞つた。
- ・越前の曲舞の一種、幸若舞がやつてきて御座敷で一番舞い。その後、又、幸若楽次郎も来て舞つた。
- ・猿楽日吉という寺本理右衛門・京なら八が罷り來たる。
- ・琵琶法師の小寺檢橋、兩度参り平家物語を度々語つた。
- ・俳諧師・松永貞徳が来て、御前で所望され發句した。
- ・天下一中、次の上手、藤重が來た。これは出し物を良く見た。古兵部様（父・小笠原秀政）の時代より「文林の御茶入れ御座候」とあり陶芸や茶道だろうか。
- ・刃物や鏡などを研ぐ研師の研屋・本屋道長に三〇人扶持を下され、それ故、おいおい明石へ罷り下り逗留し御唱申し上げた。
- ・刀劍匠の本屋八郎兵衛を召し寄せ、將軍家光の世継ぎ誕生の御祝儀として、葵の御紋入りの国後の御刀、国光の御脇差を造らせた。
- ・長谷川等伯を祖とする絵画の長谷川派の長谷川等仁が明石へ下り明石城御屋敷の絵を描いた。その子等順も出入りした。
- ・蒔絵屋清水宗寿が、さのみ能面、女面、古き能面などの面打ちをした。

というものは武蔵が能楽、連歌、蹴鞠、囲碁などに親しみ、また時期は不明確だが、武蔵はある有名な「古木鳴鶴図」

（「了戒」「伯耆安綱」「上総介兼重」「相州正宗」）を目利きして所持したし、さらに彫刻した名品は仏像や刀の鍔など数多くあると伝えられているように、諸芸・諸道に通じてい

たからである。

そしてこれら諸道に通ずる重要性を、武蔵は、武士道に欠かせないとして後年に記す『五輪書』に次のように認めた。

武士は文武二道といつて、（兵法に奮闘し、かつ視野を広める他の知識なども吸収する）この二つの道をたしなむことが武士の道である。：劍術だけをやつていては、まことの剣の道を知ることはできない。：他をよく知らなければ、自己を知ることはできないのだ（地の巻）

武士道とは、文武両道を第一とし、宗教、建築、軍学、兵術、能楽などの分野を究めた人らと積極的に接し、その分野の知識や極意などを吸収し悟ることだという。前記した一枝一能以外の分野に関するものを次に挙げてみる。
・禪宗の高僧らのいう禪の心「無」は、剣の道にも相通ずるとした「劍禪一如」なる考え方。

・大規模な神社仏閣を建築するにあたっての棟梁の考え方と

6 樹木屋敷の築造に込められた狙い

その後寛永年間（一六二四～四年）、小笠原忠真は、中堀に接した捨曲輪内（現・明石公園陸上競技場辺り）に藩主らが憩い接待する場としての築山や滝、庭園もある立派な樹木屋敷の築造を計画した。専門の庭師や棟梁などが多くいるにも拘らず、武蔵に贅を尽した樹木屋敷の築造を、家臣や藩船も自由に使って一年以内に完成するように、と命じた⁽⁹⁾。

しかし武蔵の庭園に対する考えは、「劍禪一如」と言うよう座禅を組んで一心に無の境地（空々寂々）に没入する龍安寺のような質素で静寂な「枯山水」だといわれている。すればこの樹木屋敷の様相とは、根本的に異なるのである。さらにこの憩いの場は西側の中堀に接し、何かあると危険極まりない所でもある。どう考へても、單なる憩いの場の築造ではなかろう。

そこで参考になるのが本多忠政も自慢したとされる北の捨曲輪である。『小笠原忠真一代覚書』に「北の堀の外に捨曲輪一構有り。：何んぞの時、馬の掛け引き自由なる所にて候。依つてふせぎの為、此の所に捨曲輪をなされ候由。：用心の為やらん」と、平時における万一（有事）への備えとしての防御用捨曲輪を設けた意図を述べている。

この樹木屋敷も造られた所は元・捨曲輪で、万一攻められた時、敵を一ヶ所へ誘き寄せるには、西側の中堀に接し

か指揮によって、大工ら現場組織を即時に効率的に動かしていく統率力など。これは軍を指揮する将の采配と同様である。

・小笠原軍学や甲州軍学での武田信玄座右の書『孫子』などが影響を与えた兵学、軍学の奥義。

・柳生五郎兵衛の試技などから見抜く柳生新陰流の極意。

こうして武蔵が、諸々の道（諸道）を究めていくことも武士道を究める条件なのだと認識するようになったのは、明石でのさまざまな人々との交流からもたらされた会得した智慮とか技量だったのではないかと思うのである。

5 武蔵、將軍家への献上品の製作

一六二二年、明石城や城下町などがほぼ来上がってきたので、忠真は將軍・秀忠に「明石を拝領したこと」「明石城築城に幕府資金を出してくれたこと」に対する御礼や明石城、城下町、明石港などがほぼ完成した旨の報告をする為に、明石拝命後、初めて江戸へ参観した。

この時、將軍家への献上の一つに武蔵が製作した「湯たんぽ」があつた（『小笠原忠真一代覚書』）。これについて忠真としては、秀忠が悦ぶであろう逸品を、高度な技術（奥儀）を会得している武蔵に、小笠原家の威信をかけて造らせたのではないかと思われる。

これも諸道の名人との出会いによる賜物ではなかつたか。

た捨曲輪の中に目立つよう藩主らが憩う豪華な建物や庭園を造ることだと考へたのではないか。その狙いとは、戦時には敵をそこへ誘き寄せ、行き止まり立ち往生する敵の一團に向かって築山の陰などから一斉に要撃してしまうという、曲輪の特質を利した巧妙な防御戦術の展開であろう。それが故に忠真は、敵が必ず標的とし、しかもその標的に躍り込んで来た敵の一團を一網打尽にやつづけてしまうといった迷路とか袋小路などを、各所に組み込んだ高度な仕掛けのある「樹木屋敷」の築造を、兵法家である武蔵に命じたのではないだろうか。

7 寺院で武蔵の作庭説

武蔵が明石の多くの寺院で作庭したという話がある。その寺院とは、善樂寺円珠院（明石市大觀町）、本松寺（明石市上の丸）、如意寺福聚院（神戸市西区櫛谷町）、雲晴寺（明石市人丸町）だと伝えられている。但し、浜光明寺（明石市鍛冶屋町）では、海辺の松林、明石海峡、淡路島の借景が美しいので、武蔵は敢えて作庭をしなかつたといわれている。

武蔵の作庭における作風は「枯山水」とのことだが、そうであれば右記寺院のどれも武蔵の作風と違うことになる。それ故に『講座 明石城史』も、「武蔵が町割りをしたということから、このような話が数多く残されていったと思われる」と武蔵の名声にあやかたような表現をして

いる。だが武蔵は明石で諸芸の道を先めていたのである。

そうであれば右記の樹木屋敷と同様、武蔵が芸術的な観点から「枯山水」と異なる鑑賞の為の作庭をしていったとしても、それは否定されるものではないと考える。

三、『五輪書』の思想と明石時代の武蔵

前記した明石時代の武蔵の体験や、推測だが諸道に秀でした人々と武蔵の出会いは、武蔵の『五輪書』にどのような影響を与えたについて考察を深めたい。そのため武蔵の「師」について述べ、『五輪書』の第一巻から第四巻までの内容と、第五巻との違いにも触れてみたい。

1 武蔵がいう「我に師なし」について

武蔵は、『五輪書』に「自分に師匠はない」（＝「我に師なし」と宣している。吉川英治は『隨筆 宮本武蔵』（一九三九年）で、凡そ「武蔵の諸芸は、一体、誰に師事したのか、誰の門を叩いたのか。況や剣道に於いてすら『我に師なし』といい、結局、何處で誰に師事して学び得たのか一字一行の文献さえ見出されていない」と疑問を投げた。そこで武蔵が「我に師なし」と宣したことを考えてみたい。

武蔵の剣術の「師」

『五輪書』に武蔵の剣の流儀として、「日々習熟して、いつもと変わらずに闘うことが兵法の急所であるが、他流派や武器の特性なども知らなければ敵に勝つことは出来ない」とある。

（約三〇年）の稽古を鍊と「水の巻」ほどに何十年も猛稽古を積み重ね、そして「剣術の真の道」というものは、敵と闘つて、これに勝つことなのだ（火の巻）と断じている。つまり鍛えに鍛えられた者が、さらにやる気満々の気合や氣力を発して敵を蹴散らかし連戦連勝していくやり方が彼の一貫した兵法の道であつたろう。

それ故に『五輪書』の一巻から四巻まで、勝つ為の心構えや闘い方のほとんど手法を、生身による兵法実践論としてキメ細かく論じている。

武蔵の兵法の極意とは「空」の境地

ところが武蔵は、この一巻から四巻までの兵法実践論では思い描いている「兵法の道」が究められないと認識したのではないか。そこで武蔵は、『五輪書』の最後の「空の巻」に、それまでの巻とは異質の僅か数行の精神面の修練でもつて「兵法の道を究める」極意を掲げたものと考へる。

そこには、「武士は兵法の道を確かに習得し、そのほかの武芸（諸芸）も身に付け、武士の行う道を明らかにしてよく心得、心迷うことなく、常に怠らず、心意（智と気力）二つの心を磨き、観見（心眼と肉眼）二つの目を研ぎ澄まし、少しも曇りがなく迷いの雲の晴れた状態（無）こそ、眞の空であると知るべきである」と記す。

この意を解するのは極めて難しいが、凡そ次のような内容なのではなかろうか。

いなどといったことを述べている。すると時の將軍から「日下無双兵法術者」の号を賜ったほどの劍術者である武蔵の養父・新免無二から朝鑽暮研で鍛えられたことで（小倉碑文）、養父を師と上げるべきと考えるが、しかし六〇余回も闘つたという各武芸者からも会得して築かれてきたであろう自身の剣の流儀を勘案、そこで師を特定することが出来ないから、「我に師なし」と言つたものと理解する。

武蔵の諸芸の「師」

前述もした武蔵の絵画や彫刻などで秀でたものが多い。だがこれは武蔵が独自の発想で芸術觀などを作り上げたというより、取り分け明石で一枝一能に卓抜した名人や達人の教えなどを次々と取り込み、その上、それらを自分なりに工夫し加工・応用して新たな別の形などへ作り変えていったから、よつて自身の多芸に対する個々の師匠が特定できないので、「我に師なし」と言つたものと理解する。

2 『五輪書』の極意について

武蔵の強さ

武蔵は、闘いにおいて身体面を強調し、遮二無二、他を圧していくタイプだといわれてきた。自らも「六〇余度勝負しても負け知らず」とか、武の道とは猛稽古（鍛錬）して勝つことなのだ、と豪語していることからもよく判る。

『五輪書』にも、「千日（約三年）の稽古を鍛といい、万日

武士という者は、猛稽古によつて兵法の道を身体で習得していくのである。だがいくら猛稽古しても心の迷いや勝ちたい欲望とか邪念などはなくならないのだ。そこでそうした迷いや邪念などを断ち切る必要がある。それには他の道のいろんな知識や技術などを会得することであり、そうすれば諸道との相対的優劣などが良く判り、その上で常に真偽を見極めていく強い心を持ち、また何事もよく観察し、そしてしっかりと精神を統一する修練をしていくのである。すると迷いや邪念などが消えて心が「無」となれば、求める「空」の境地に達しよう。これで初めて武士として、眞の「兵法の道」を究め知ることになる。

つまり兵法を究めることとは、鍛えられた身体に心の迷いなどを払拭する精神面の修練を重ねることによって、そこで初めて「空」の境地に達した者だけが「兵法の道」を知った武士になれるのだ、と言つてゐるものと理解する。

武蔵もこの「空」の状態を、「兵法の道に自ずから自由自在となり、自ずから非常な力量を得て、事に臨んではそのままの拍子を知り、自ずから敵を打ち、自ずから相対する。これはみな（自然と眞実の境地に入るという）空の道である」（「地の巻」）、と人間離れした域の如くの説明をしている。するところは、自然体で自在に勝つていく超人的・魅力的な「剣

聖」のことを言つてゐるのではなかろうか。

よつて武藏は、最後に精神面の修練を神威付けて「空」の境地（「無」）に達しなければ兵法が求道できないと論じたことで、『五輪書』が実践実技書から高邁な兵法書に仕上がつていつた、と思われよう。

「空」の境地を悟つたのも明石だつた？

では、こうした思想そのものの「師」はだれなのか、どのように身につけたのか。それを考へる時、明石時代の諸道の名人たちとの出会いがあつたと考へる。

それは高僧らから「無」となる禅道の極意を教わり、「劍禪一如」と名付けたとか、また特定できない多くの諸道の名人からも、迷い、不安、焦りなどや勝ちたい欲望、自信過剰、慢心などの邪念を断ち切つて平常心を保つとした「精神面の修練」といったものを、武藏は明石で事あるごとに会得したことによつて、そうした中で「空」の境地を悟り体系付けていつたと考へる。

おわりに

明石に来るまでの剣豪・宮本武藏は、武者修行するなどして兵法の道を求めようと必死だつたと考へる。武藏は明石へ来て、十数年間、道場を開くことも剣術指南することもなく、ひたすら町割りや樹木屋敷の建築などに精を出していた。町割りも樹木屋敷の建築も、兵法「城塞論」の実

として、ひときわ大成し歴史にその名を久しく留めることになつたと思えるのである。

注

(1) 宮本武藏が一六四五年に著す。五巻あり。それについて、

①「地の巻」は、序に始まつて武藏の二刀流・二天一流の流儀を具体的に、②「水の巻」は、剣術の道理を具体的に、③「火の巻」は、一瞬を争う戦いにおける対応を具体的に、④「風の巻」は、他の兵法などと比較しその優劣を、⑤「空の巻」は、自然体での対処を、それぞれ述べている。

(2) 小笠原忠真（一五九六～一六六七年）とは、本名・忠政であるが一六四四年に忠真と改名したことから、それまで義父・本多忠政と同名であり混同するので、勝手ながら当初より忠真と称することとした。一六〇六年、兄・忠脩とともに秀忠御前にて元服し秀忠の一字を拝受した。一六一五年の大坂夏の陣までは一〇〇〇石の部屋住みだったが、この陣で父と兄が戦死した。兄の乳呑み児を将来の小笠原家当主として育っていく為に、忠真は兄の「名代」となり、かつ右近大夫と称し信州松本藩を襲封した。一六一六年、忠真是未亡人となつた兄嫁（忠政の娘で秀忠養女）を妻に娶り、そしてその模な設計の下に築かれたが、未だ完成せぬ（無防備な？）簡

政の時、宮本、姫路に至り剣術道場を開き標札を掲げて曰く
『日本第一剣術之達人 宮本武藏』と。

(5) 『尾參宝鑑』に、武藏が姫路藩に客分として取り立てられたことを記している。

「姫路藩士、之（武藏が『日本第一剣術之達人』だということ）を聞き怒りて曰く『四天王第一位に居る本多家の城下に來り、日本第一の達人と標札して道場を開く無礼の極み、彼の輩を攻撃して放逐すべし、或いは殺すべし』と囂々たり。忠政、之を聞きて曰く『宮本、真に日本一の達人たらば、我、之を臣とせん。若し然らざれば試合して以て恥辱を与えて謝し來意を問う。三宅、武芸の試合を申し込み。武藏笑ろうて曰く『來意かくの如くなれば早く面すべかりしに、客と碁を圍みて閑時を消せり。先ず庭上に來たれ。而してその用具、刀か木刀か、來賓の希望に任す』と。三宅、益怒ると云えども主命なれば、其の技の如何を試みるのみ。決して殺意なし。何ぞ刀を用いんと庭中の竹を覗て木刀に換ふる。武藏、木刀を揮つて庭上に（て）試合す。軍太夫、敵する能わざ（完敗）、稽首（敬礼）して其の大言壯語『日本第一』の号を自称するを至当として、帰り藩主忠政に啓す。忠政、武藏を召して『臣事せよ』と。武藏、辞して云う、吾志望あり。藩士となる（仕官）の意なし。（説得し）遂に二百石を給して（客分）。藩士の子弟を教授せしむ。子弟、門に充ち其の技を学ぶ。故に東軍流の名を失し武藏の流派円明流を以て藩の武芸とするに至る。武藏、姫路に在る二年、弟子大いに進む。」

践であることに間違いないが、寸暇を惜しむ武藏にとつて、明石へ来たのは無駄足を踏んだのではなかつたか……、と当初はそんな思いが胸裏にあつた。
しかしながら、明石で忠真の許に集まつて来るその道の第一人者や名人などと、接する機会も武藏に多々あつたと想定すると、武藏が町割りをしていたことが武藏の人生にとって「一大転機」を迎えるほどのものがあつたと思われた。その転機とは次のような人らとの出会いであつたろう。

・神社仏閣を建築する関係者として、多くの宗教者や名のある棟梁、大工、建具師、庭師ら。
・忠真への陣中見舞とか御機嫌伺いに、明石へやつて來た一芸に秀でた数多くの芸能人ら。
・小笠原軍学などの研究者とか、柳生新陰流を試技する柳生但馬守宗矩の甥・柳生五郎兵衛、等々。

天賦の才を持ち探究心旺盛だといわれる武藏は、これらの人たちと接して薰陶を得て、兵法や宗教は勿論のこと、美術、能楽、彫刻といった諸道の深奥な知識や技術などを会得し究めていく中で、武藏の才気が触発され多芸に通じていつたのは、至極、当然の成行きであつたと考へる。
いずれにしても、武藏は、そうした眞の「兵法の道」を求めていく道筋にある禅なども含めた諸道を、ここ明石で究めていつたことで、これからオールラウンドの武芸人

(6)『姫路城史』に、「忠政は自ら西国探題職の重大責務を有し、

仮令泰平の世と雖も軍備を忽せにすべきでないので、その未完成箇所の修補をなし防備の完璧を期する為に、將軍家の姫君である千姫並びに忠刻の居館及び己が居館を新たに築こうとして（西ノ丸の「化粧櫓」や三ノ丸の「住居御殿」など）、元和四年（二六一八年）五月一五日、將軍秀忠に請い、その

(9)『小笠原忠貞一代覚書』に「明石御城、(本)三の丸、西側原久光(一男、実母ハ小原上野守源信利(小原城主)ノ女、慶長一七年(一六二二)一〇月二日播州印南郡米隨邑ニテ生ル。寛永三年(一六二六)於播州明石奉仕于忠貞公、貞次、時二、一五歳。寛永八年(一六三二)御家老職干、時二、二〇歳。寛永九年(一六三三)忠貞公ニ從テ豊前小倉ニ移ル、采地二千五百石…」とある。

命（築城許可）によつて大いにこれを修めた」とある。そしてその西ノ丸などの完成は『台徳院殿御実紀』に、「元和八年（一六二三年）一月、本城構造成功（完成）しければ、大納言殿（忠刻）は本多美濃守忠政が邸より西城（西ノ丸など）に移り給う」とある。

（7）『講座 明石城史』に、武藏が明石に来るに至つた理由やその武藏が明石で活躍したことなどを次のように記していく。

ある。

との接点はこの辺りにあつたと思われ、小笠原忠政（忠真）の明石築城に際して、武藏の兵法家としての腕を見込んで協力を頼んだものと考えられる「そのころの明石は、明石川の流れが定まらず、東への流れもあって、城下町になる辺りは広大な湿原であつたと言われ、大変な工事だったと想像できる。武藏がどんな町割りをしたのか、資料もなく分らないが、地誌などからみると、町並みは裏行き一六間（約二九・一メートル）に定めている。城下町の規模は、東西が一二七四間（約二、三キロ）、丁数は一二丁余りであった。明石城が築城されてから二〇年余りのうちに描かれた「明石城絵図」（講座 明石城 史）に添付 が残されており、宮本武蔵が町割りをした形を見ることができる。

参考図書

宮本武蔵『五輪書』(大河内昭爾訳) ニュートンプレス社
『二天記』武藤敬男『肥後文献叢書第二巻』所収、歴史図書社
『小笠原忠真一代覚書』乾・坤『東京大学所蔵賸写本』。その説
み下し本(訳・勇伊宏)は明石市立図書館、兵庫県立図書館が
所蔵

『水野様御一代記』広島県『広島県史』近世資料編1所収
『武公伝』松延市次他『決定版 宮本武蔵全書』所収、弓立社
加来耕三『宮本武蔵事典』東京堂出版

吉川英治『隨筆 宮本武蔵』朝日新聞社
朝倉治彦ほか編『仮名草子集成 海上物語』東京堂出版
小菅廉ほか編『尾參宝鑑』明治三十一年編纂、国会図書館蔵
福岡県『福岡県史』第三卷下冊一第五編 豊前国

〔宮本家系図〕宇都宮泰長『宮本玄信伝史料集成』所収、鵬和出版
明石城史編纂実行委員会編『講座 明石城史』『明石記』『金波斜陽』、『古老茶話』收載。明石市教育委員会
黒田義隆『明石市史 上巻』明石市役所
黒田義隆『明石市史資料 (近世編)』明石市教育委員会
〔文久年間明石町之図〕野田猪左雄『明石郷土史』所収、大観堂
常高等学校
黒田義隆『史話 明石城』のじぎく文庫
橋本政次『姫路城史』姫路城史刊行会
濱田昭生『宮本武蔵の一生』東洋出版社
濱田昭生『武蔵も関わった明石城と城下町築造の秘話』神戸史学
会(西日本新聞社)三三二号

展示施設」・人権博物館の活用は、未来への投資」・駒井忠之、「兵庫」「西御着総合センター」皮草資料室「郷土人権資料室「ゆくつち」・鶴野飛行場跡(鶴野飛行場資料館)など。^{173号}「憲法と人権、差別されない権利」木村草太、「戦時下神戸の連合軍捕虜の足跡」飛田雄一など。^{174号}「戦後兵庫部落解放運動概史」(一九四六年(一九七八年)高木伸夫、「兵庫の解放運動と在日コリアン(回想)」辻本久夫、「但馬・出石部落差別と解放運動」足田仁司、「二度と子どもたちに涙を流させてはいけない」同和教育から人権教育への移行期 淡路からの報告」山添繁など。神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階、ひょうご部落解放・人権研究所。

◆『**播磨歴史研究**』79・80合併号『佐保講』の成立について—『伊勢信仰の盛行』の一例証— 神崎壽福、「國恩祭の創祀時期について」・關口洋介など。高砂市荒井町千鳥2-23-12、播磨歴史研究会。

受贈図書紹介

- ◆『西宮文化協会会報』617号「「ブラジル、コチア産業組合と下元健吉・亮太郎兄弟のこと第一回」二宮健、「能舞台の四本の柱」森村暁子など。618号「西宮の洋画家辻愛造（二）」枝松亜子など。619号「エビスカキ道中記（5）北海道篇 苦小牧恵比寿神社から」武地秀美など。620号、「「ブラジル、コチア産業組合と下元健吉・亮太郎兄弟のこと第二回」二宮健、「少年と神社の森」出会いと再会」「小西巧治など。621号「西宮の洋画家 辻愛造（三）」枝松亜子など。622号「新春の「謡初之式」森村暁子など。西宮市社家町1-17、西宮神社内 西宮文化協会。